沙羅の花と鱧の思い出

森崎光子

七月十六日の深夜、和田先生の訃報を電話で知らされて、恐れていた日がとうとう来たかとショックを受けました。不可能と頭では分かっていながら、いつまでもお元気で長生きしていただきたいと、かねがね念じていたものですから――。弔問に伺って、何年かぶりにお宅を拝見していると、かつて定期的に先生のお宅に伺っていた頃のことが懐かしく思い出されてきました。

実は、私は一度も和田先生の授業を受講していません。近代文学研究者としての先生のご高名とお人柄についてはかねてから耳にしていて、受講したいと思っていたのに、先生の退職の時期だったため、その機会に恵まれなかったのです。大学院に進学してから、和田先生が広津柳浪の研究会を始められるというとき、お誘いを受けて、末席のメンバーとして参加させていただきました。この文章を書くために調べてみたところ、この研究会は、昭和五十八年に発足してから平成二年の解散まで八年間にわたって活動していたことになります。その間、ほぼ一月に一度、先生のお宅に伺っていました。私にとっては、この場が、先生のご指導をいただく教室となったわけです。

研究会が始まる前に、二階の先生の書斎に通されることもありました。出窓があって、その出窓を背後に机が置かれていました。書類が乱雑に積まれていたことなど一度もない、趣味の良い部屋で、私の憧れの場所でした。趣味の良さとともに印象深かったのは、ワープロやファックスをずいぶん早くからお使いになっていたことです。当時、私を含め他のメンバーで、ワープロを使っている人はいませんでした。つまり、一番ご高齢だった先生が、OA機器を取り入れるのが一番早かったわけです。そういえば、研究会で忘年会などをしたとき、カメラを持参して記念写真を撮ってくださるのも必ず先生でした。思うに、これも、先生が進取の気象に富んでいらっしゃったことの一つの現れだったのでしょう。

書斎を出て奥の階段を下りると、家の裏手に蔵があって、その蔵が書庫になっていました。一度先生に案内していただいて中に入ったことがありますが、たくさんの書棚が林立していて、山のような蔵書が詰まっていました。本はジャンル別に分類してあり、書斎と同様、隅から隅まで整理整頓の行き届いた書庫でした。「ちょっと書庫から本を……」と仰って出ていかれても、すぐにその本を持って戻って来られていましたから、蔵書の内容とその在り

処をきちんと把握されていたに違いありません。狭い部屋に住みながら、必要な資料を捜し出すのに苦労している自分自身を省みて、恥ずかしく思ったものです。

確か、六月のことだったと思います。一階の奥にある茶室に案内していただきました。茶室の外に植わっている沙羅の樹の花が咲いたので、私たちに見せてくださったのです。椿に似た白い清楚な花でした。開花期間が短く、わずか数日で散ってしまうと教えられました。それ以前に沙羅の花を見たことがあったのかもしれませんが、印象に残っておらず、そのときまるで初めて見たかのような気がしました。

沙羅の花は、芥川龍之介の「相聞　三」（大14）という詩に出てきます。

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

片山広子に対する恋愛感情を封じ込めたこの詩で歌われた沙羅の花を、意識して初めて見たのが先生のお宅だったというわけです。片山広子は、こういう花に準えられるような女性だったのかと思った記憶があります。それ以来私は、沙羅の花と言えば、芥川の「相聞　三」と和田先生を即座に連想するようになってしまいました。

もう一つ、先生の記憶と強く結びついている事柄があります。何かの折りに、上司小剣の代表作「鱧の皮」の名を口にしたところ、先生から鱧の発音のアクセントが違うと注意され、正しいアクセントを教えていただきました。私は関西出身ではないので、それまで標準語のアクセントで読んでいたのですが、関西の読み方ではアクセントが標準語と反対になることを、先生に指摘されて初めて知りました。確かに、鱧は主に関西で食べられる魚で、作品の舞台も大阪の道頓堀という上方情緒の濃厚な小説ですから、内容からしても関西アクセントで読むのがふさわしいと思われます。そのときから私は、鱧と口にするたびに、関西アクセントで話しています。これは先生に教えていただいたことだと意識しながら――。

先生の学会での、また短歌界での功績の大きさは言うまでもありません。私自身も先生から研究の面で様々の厚恩を受けました。この文章でもそういうことについて記すべきであったのかもしれませんが、私が和田先生について真先に思い出すのは、ここに書いたようなささやかな出来事なのです。

ふつつかな私につねに優しく接してくださった先生。もうお目にかかれないということが、いまだに信じられません。先生のご冥福を衷心よりお祈り申しあげます。

（もりさき・みつこ　花園大学非常勤講師）